著者インタビュー

『ドストエフスキー　黒い言葉』

亀山郁夫
聞き手　梅垣昌子

梅垣　まず最初に、亀山先生、おめでとうございます。昨年の十月に刊行された『ドストエフスキーとの旅』が、このたび、ロシア語の翻訳で出版されたと伺いました。ついにロシアデビューですね。

亀山　はい、三か月遅れで出ました。昨日その知らせが届いたところです。早速、ウェブサイトで確認しました。嬉しいような、恥ずかしいような。でも一つ、残念なことがあるのです。じつは、今回のロシア語訳は、以前、日経新聞社から出た『ドストエフスキー五十九の旅』の翻訳なのですね。昨年十月に岩波の現代文庫で出た『ドストエフスキーとの旅』は、そこに新たに二十一編を書き加えた新バージョンで、むしろこちらのほうを翻訳してほしかったという思いがあります。新バージョンでは、二〇一一年から現在にいたるまでの最新の情報も書き込まれていますし、何といっても、東日本大震災におけるドストエフスキー体験も出てきます。ロシアの読者には、この新バージョンのほうが、よりヴィヴィッドにこの本の意味を受けとってもらえたのではないか、と思うのです。

梅垣　なるほど、そうだったんですね。二〇一〇年刊行の『五十九の旅』のバージョンアップが、昨年十月の『ドストエフスキーとの旅』。つまり、ロシア語版は旧バージョンの翻訳だったということですね。さて今日は、二〇二一年七月に集英社から刊行された新書『ドストエフスキー　黒い言葉』について、著者の亀山郁夫先生にお話を伺います。二〇二一年は、ドストエフスキー生誕二〇〇年にあたります。世界各地でさまざまなイベントなどが開催されたと思いますが、この記念すべき年、亀山先生は大変お忙しかったのではないでしょうか。

亀山　はい、文字通り、老体に鞭打ってという感じでしたね。しかし、今ではもう何か遠い過去の出来事のようにも思えます。

梅垣　最初は、昨年三月のシンポジウムでしたね。

亀山　そうです。若干、体調を崩し、報告原稿を先生に代読してもらうというハプニングもありました。その後、七月から本格的な活動がはじまりました。NHKラジオ第二放送で、「ドストエフスキー・現代へのメッセージ」の連続講義、全十四回を行いました。NHKテレビの「視点・論点」にも十三年ぶりに出演しました。書籍としては、まず今回のインタビューで話題となる『ドストエフスキー　黒い言葉』ですね。そう、ドストエフスキー五大長編のうち最後の『未成年』の第一巻が出たのが、十一月です。このあたりから怒涛のようにイベントが重なり、若干、前後不覚の状態に陥ったことも確かです。（笑）

梅垣　そういえば、『罪と罰』をリレー朗読する、というイベントもありましたね。ご案内をいただいて、YouTubeで視聴しました。それにしても、あれほどの行事はどのようにして可能になったのでしょうか。

亀山　これは、若いドストエフスキー研究者の齋須直人君が、がんばってくれました。アルゼンチンのドストエフスキー協会の主催で、『罪と罰』全四十一章を各国語で読みつないでいくという企画です。世界諸地域のドストエフスキー・ファン、ドストエフスキー研究者、翻訳者が順に読み継ぎ、総計二十六時間に及ぶ長丁場でした。私が朗読したのは、第六部の最終章。主人公のラスコーリニコフが、ソーニャの願いを聞き入れてセンナヤ広場で大地に接吻し、そのあと、警察に自首して出るという場面です。朗読しながら、今ならもっとうまく訳せるな、と思った箇所がいくつかあったことも告白しておきますね。

梅垣　先生は、ご自身が翻訳されたテクストを使って朗読なさったのでしたね。イベントの運営のかたでしたか、貴重なケースとして紹介されていたのを思い出しました。先生の今回のお仕事の大きな成果の一つに、名古屋外国語大学出版会から出た論文集『ドストエフスキー　表象とカタストロフィ』がありましたね。国内外の論文が二十一本、入って

います。

亀山　梅垣先生も寄稿者の一人でしたね。編者としてお礼を言います。ドストエフスキーの作品のアダプテーションをめぐる画期的研究だと思います。それと、共編者の甲斐先生には、昨年十二月に亡くなられた筆者の一人で、元国際ドストエフスキー学会会長のデボラ・マルティンセンさんの『白痴』論の翻訳をお願いしました。

梅垣　それともう一冊、科研チームのメンバーで責任編集をされた、『現代思想』の臨時増刊号「ドストエフスキー生誕二〇〇年」もありましたね。総計四二二頁に及ぶ論文集です。

亀山　『現代思想』のドストエフスキー特集は、これが二度目です。前回は、二〇一一年に、望月哲男さんとの共同編集で作ったのですが、今回は、若い世代の二人の研究者、番場俊さんと越野剛さんのお二人を加えました。あっという間にできあがったという感じですが、舞台裏は綱渡りだったようです。でも、売れ行きも非常によいと聞きました。

梅垣　十一月はドストエフスキーの誕生月でした。NHKの「一〇〇分 de 名著」では、生誕二〇〇年ということで『カラマーゾフの兄弟』が放送されましたが、再放送だったんですね。

亀山　そうなんです。じつは、二年前の放送時は、海外出張中でほとんどチェックできなかったのですが、今回、改めてじっくり見直して、思った以上によくできているので安心しました。私は、自分の出た番組はほとんどみることはしないのです。

梅垣　そして十二月には「ドストエフスキーの星」勲章を受章されました。めまぐるしい一年だったと思います。新型コロナウイルスの感染拡大で、各種イベントに大きな制約がかかりましたが、その状況下でも、オンラインの行事や書籍などの出版、さらにテレビ出演など、大変ご多忙のスケジュールだったのですね。

亀山　ただ、残念だったのは、三年に一度開かれる国際ドストエフスキー学会（IDS）のイベントが八月に延期されたことです。本来なら来月、つまり三月に開催されるはずだったのです。何といってもワクチンのタイプや、隔離期間をめぐる政府の方針がありますから、八月に延びたといえども予断を許しません。多くの研究者は対面を望んでいますが、肝心のロシアの研究者の参加が皆無、という事態も考えられます。

梅垣　先の見えにくい状況で、IDSのホームページを立ち上げるという大変な作業もあったなか、『ドストエフスキー　黒い言葉』が刊行されたわけですが、これまでにたくさんのご著書を発表なさっている亀山先生にとって、このタイミングでの刊行には、特別な意味があったのでしょうか。そもそもこの本は、生誕二〇〇年を念頭において準備をされたのですか。たしか、雑誌『すばる』に一年間連載されたものが、下地になっているわけですね。

亀山　はい、生誕二〇〇年を念頭においていました。しかし、連載前の構想とはずいぶん異なったものが出来あがりました。当初は、ドストエフスキーの言葉に簡単に感想を付け加える程度のものだったのですが、すぐに飽き足らなくなり、全面的にプランを立て直して、連載の運びとなりました。今回、新書化するにあたって、若干の書き足しを行い、章立てを変更しました。ただ内容的には、連載と大きく変わるところはありません。

梅垣　ところで、この本のタイトルは「黒い言葉」となっています。黒というと、日本ではネガティブなイメージを喚起することもありますが、この本ではどのような意味が背景にあるのでしょうか。

亀山　「前書き」にも書いたことですが、黒には豊饒のイメージを重ねています。ただ、黒イコール豊饒、というのは、あくまでも私の仮説です。実際のロシア体験から発想されたものなんですね。真っ白な雪に覆われた大地が、太陽光と地熱によって甦る。白が黒に替わる。このように、死から再生へというプロセスを目の当たりにして得た実感です。白イコール死、という考え方には、じつは、もっと宗教的な土壌があるのですよ。これはロシアの宗教セクトとも関わりがある、かなり複雑な問題で、「カラマーゾフ」という言葉の起源にもつながっています。「カラ

マーゾフ」には「黒く塗られた者」という意味があるんです。これらをもろもろ考えあわせて、「豊饒」というイメージが湧きだしてきました。

梅垣　なるほどそういうことなのですね。「豊饒」というのは、その漢字に「土」がたくさん入っていることからもわかるとおり、大地と結びつく言葉ですね。のぎへん（禾）の「豊穣」ですと作物の実りを連想しますが、その大前提となるのが土の豊かさやパワーというわけですね。

亀山　ドストエフスキーの哲学の根本に「土壌主義」という考えがありますが、そこにも通底する思想かもしれません。

梅垣　今回のご著書を手に取ってみますと、新書ですから、ほどよく手に馴染み、手軽にページをめくることができます。新書だと半日くらいでざっと目を通せるかなと思ったのですが、読み進むほどに、表紙と裏表紙の間に蓄えられた、まさに豊饒な言葉の深い森に分けいる感じを体験しました。実は、裏表紙に辿り着くまでに三週間ほどかかったのです。ドストエフスキーの作品名も沢山出てきますし、各種手紙や作家自身の『手帳』、そして研究書や論文などにも数多く言及されています。

亀山　大切な時間、ほんとうに申し訳なく思います。でも、そうやって真剣に読んでくださって感謝しています。たしかに、新書にしては分厚いですし、そもそも新書のコンセプトから離れた内容でもあります。しかし少しでも広く、ドストエフスキーの「言葉」を知ってほしかった、ともかく言葉に出会ってほしいという願いがありました。

梅垣　この一冊で本当にたくさん、ドストエフスキーの言葉に触れることができました。そこで、ドストエフスキーの初心者としてのお尋ねですが、この本は、やはりドストエフスキーの作品をちゃんと読み込んでから、手に取るのがよいでしょうか。あるいは逆に、この本をきっかけとして、読者がドストエフスキーの世界に足を踏み入れていく、ということを想定されていますか。

亀山　私の意図としては、独立した箴言集として、まずはこの本を読んでほしいと思っています。それらの言葉をある程度頭に入れたのちに、ドストエフスキーの原作を実際に読んだら、「再会」の喜びに似たものが経験できるはずです。既視感は、本を読むうえで推進力となります。全体としてみると、一種の伏線のような効果でしょうか。これが映像だと、まったく逆の関係になるのですが。ですから、ドストエフスキーの本格的な読書に入る前の、ウォーミングアップの書として、この本を位置付けるのがよいかもしれません。

梅垣　なるほど、安心いたしました。先生がこの本に引用されたドストエフスキーの言葉のなかで、コロナ禍の今こそ味わってほしい、というものはありますか。

亀山　はい、ほとんどすべてといってよいくらいです。このコロナ禍のなかで、多くの人たちが、生と死、運命といったことを考えてきたと思います。ドストエフスキーの時代にカタストロフィと呼べるものは、戦争とコレラ禍でした。いや、彼にとっては、人生そのものがカタストロフィの連続だったわけです。死刑宣告、流刑、恋愛、癲癇の病、そしてルーレット。波乱万丈の生涯です。彼の個人的な手紙はすべて当局によって無断で開封されました。ものすごいストレスです。自分の個人メールが、すべてだれかに読まれる状態を想像してほしいんですね。彼の言葉が現代的にならざるをえないのは、当然のことです。

梅垣　私がひじょうに気になっている言葉の一つに、「神がなければ、すべては許される」というものがあります。先生がいまおっしゃられた「現代的にならざるをえない」ということと、なにか関係してきますでしょうか。

亀山　そう、まさに。この『黒い言葉』は全十二章からなっていて、その中間部、つまり六章と七章の間に、インターミッションという補章が挟みこまれています。この章のタイトルが、まさにいま先生がおっしゃられた「神がなければ、すべては許されている」なんですね。ドストエフスキーを考える上で最大のキーワードの一つ、といってもよいでしょう。この補章では、この言葉の意味について、徹底して書き込みました。現代の日本で起こっているいくつかの凶悪犯罪を考える際、つねに参照すべき言葉だと思います。ただ、この言葉はひじょうにポレミックなんですね。たとえばスラヴォイ・ジジェクは、「神があれば、すべては許されている」という事態を、ＩＳの問題にからめて考えています。いずれにせよ、非常に興味深いテーマです。

梅垣　神と許しをめぐって、いろいろな議論のバリエーションが出てくるわけですね。ポリフォニーや分身といったキーワードも、たくさん出てきました。まさに、ドストエフスキーの言葉を中心に据えた、壮大なコスモスの集大成ですね。それでいて、箴言集という側面は初心者むきでもあり、大変贅沢な一冊ということになります。しかし、このような

豊饒を一冊にまとめるのは、相当に大変なことではなかったでしょうか。

亀山　連載をはじめる前、編集者と何度も打ち合わせをしました。かなり率直に意見をぶつけあいました。たとえば本のタイトルについて、最初、「ドストエフスキー　黒い預言」という提案をしたのですが、編集者は頑として「黒い言葉」のほうがいいというのですね。そういう意見の対立も含めて、徹底した議論の末に作られた本であることは確かです。

梅垣　神の言葉を預かるという「預言」ですね。構成に目を移すと、同じ引用を複数の章で用いるなどして、単線的にならないような工夫がなされているように思うのですが、あえてそうした理由など、あるのでしょうか。

亀山　長い連載でしたから、前に引用したのを忘れて再引用するといったこともありました。でもそのうち、読者の頭に刻みこむには、むしろ再引用も悪くない、という見解に立ちました。しかし、全体として肩に力が入りすぎているような気がします。書き手としてもう少し成長しなければ、と思うところがあります。

梅垣　ところで、新型コロナウイルスのパンデミック以前、対面でいろいろなご講演をされていたときには、ドストエフスキーを読み解く鍵として、「黙過」（もっか）と「使嗾」（しそう）という言葉を多くお使いになっていたように思います。しかし今回の本では、どちらとも、一回だけしか使われていませんでした。そのかわり「原罪」「疾しさ」というコンセプトを中心に、説明を展開なさっています。これは何か先生のほうで、ドストエフスキーにアプローチする方法に、変化が起きたということなのでしょうか。

亀山　大切な点に目をつけてくださいました。私のドストエフスキー読解の基本は、おっしゃる通り、「黙過」と「使嗾」の二語に尽きるといってよいでしょう。「黙過」は、だまって見逃すこと、「使嗾」は、自分の手を汚さずに人を唆して、みずからの願望を実現することを意味します。しかし、今、指摘されるまで気づきませんでした。自分の気持ちとしては、この二つの言葉を併せて何十回も使ったような気でいたのですが。どちらも一回だけとは、驚きましたね。おそらく本全体のテーマがその二つに帰結するので、結論に至る過程で、結論を言い表す言葉は使いたくない、という無意識の判断が働いたのかもしれません。それに私自身、これまでこの言葉を使いすぎていましたので、今回は別の言葉による説明を聴いてほしい、という思いが強かったのかもしれません。

梅垣　それで謎が解けました。そういうことだったのですね。さきほどのお話では、生誕二〇〇年記念にあわせて名古屋で開催されるはずだったドストエフスキーの国際大会が、コロナのために延期になったとのこと。二年も続いているこの状況、そろそろ、出口の門を遠くからでも発見したいところです。その先にあるポスト・コロナの時代、ドストエフスキーの言葉は、どのような意味をもって響いてくるのでしょうか。

亀山　非常に難しい問題です。過去二年間にわたるコロナ体験が、人間全般というか、人類のメンタリティにどういう影響を与えたのか、という問題と深くリンクしています。私はこの経験を通して、日本人のメンタリティが三十年、後戻りしたという印象をもっています。バブル期のメンタリティですね。ドストエフスキー自身、破天荒ともいえるバブル的な感覚を持っていましたから、ひょっとすると今以上に、共通する部分が生まれてくるかもしれません。ドストエフスキーというのは、ある意味で非常に非文学的な作家なんです。書簡を見ると、話題はもうお金のことばかりです。小説世界もそう。ところが、そこが現代人の心にリアリティを生むのだと思います。ポスト・コロナ時代に、人類のメンタリティに何かしらサブライムな奇跡が起こるとも思えません。グローバル化の流れが復活します。すさまじい二極化の現実をひきずりながら。そうするとますますドストエフスキーの文学は、リアリティを持ち始めます。ドストエフスキーが読まれるというのは、不幸な事態の現れなのです。

梅垣　今のご説明で、ドストエフスキーの文学のパワフルさが、よくわかったような気がします。そこで、今後の展望という見地から。コロナを経て、大学の授業も全面オンラインを経験しました。テクノロジーが進み、メタバースという言葉もよく聞かれるようになり、仮想現実の世界がもう、現実のものとなってきました。文字よりも映像が主流になっていく感があります。ドストエフスキーの言葉、さらに文学の言葉は、その世界で生き残ってゆくでしょうか。ドストエフスキーは、メタバースの時代にも読み継がれるのでしょうか。

亀山　よい質問です。いま、メタバース（仮想空間）における仮想人間への自我の変容ということが、一つのモードになっていますね。平野啓一郎さんの最新作『本心』はまさに、それに近い世界を扱っています。

二〇四〇年代の初め、謎の死をとげた母の本心を知りたいと願って、主人公の青年は、母のＶＦ（ヴァーチャル・フィギュア）をＡＩ会社に制作してもらう。母のＶＦには、蓄積されたライフログの上にどんどん新しい情報が付け加えられ、進化を遂げ始めて、最終的に母の本心を知るという物語です。物語の設定は、すさまじく非現実的というか、まさに仮想現実でのドラマとなっているのですが、主人公の青年やその母親の情念は、二〇〇年前のドストエフスキー時代のそれと大差はありません。つまり、科学技術がいかに進化しようと、人間は普遍なのだと思います。生まれた段階での人間は、一万年前も同じです。問題はそれからですね。いってみれば、初期設定の違いがその後、大きな変化を生んでいくだけのことです。であれば、ドストエフスキーは読み継がれると思います。彼は、何といっても「魂のすみずみ」までを描くことを作家としての使命とみなしていましたから。でも、やはり原作が長すぎることは事実です。そうなると翻訳の勝負です。最後までいっきに読ませる翻訳をどう作るか、ということですね。あるいは、先生が関心を持たれているアダプテーションが鍵となるかもしれません。アダプテーションによって、つまりみずからのアバターによって、サバイブしていくという可能性もありそうです。ドストエフスキーの問題は、活字文化の運命と表裏一体だと思います。

梅垣　最後に、翻訳の問題についてお伺いできればと思います。亀山先生は『カラマーゾフの兄弟』の翻訳がミリオンセラーになって以降、次々に翻訳を手がけていらっしゃいますが、翻訳上の工夫とはどのようなものなのでしょうか。

亀山　翻訳者の使命は、読者に最後まで読ませるということに尽きます。そのためにリズムを工夫します。ドストエフスキーを読むときに障壁となるのは、何と言っても名前の長さと複雑さですが、そこを徹底して簡素化しました。『赤と黒』を読んでください。登場人物の呼び方は、全編貫徹して「ジュリアン・ソレル」と「レナール夫人」です。しかしロシア文学となると、夥しい数の愛称形、父称……。しかし、それはあくまでも表面的な問題です。大切なのは、そうですね、内的リズムとでもいうのでしょうか。私は、元来、詩が専門ですので、リズムにはこだわりがあります。

梅垣　なるほど、それこそがドストエフスキー亀山訳の魅力の秘密ですね。従来の翻訳の中では、先生は、どなたの訳をお薦めされますか。

亀山　これが、作品ごとに違うのですね。マーラーの交響曲全九曲で、指揮者ごとに得手不得手があるのと同じように、この翻訳者だからすべてがいい、というわけではありません。『カラマーゾフの兄弟』では、やはりダントツに恩師である原卓也さんの訳（新潮文庫）がよいと思います。ただしこの訳でも、今の若い人が最後まで読み通すには、大きな労力が要るはずです。『未成年』は、北垣信行さんの訳（講談社）が優れていると思います。『悪霊』は、やはり江川卓さん（新潮文庫）でしょうか。しかし、江川卓さんの『悪霊』冒頭の訳と、私の訳をぜひ比べてみてください。正確さと読みやすさの二つのコンセプトがいかに両立しがたいか、ということに気づくはずです。『白痴』『罪と罰』については、また、どこかの機会にお話しすることにしましょう。

梅垣　はい、またの機会に、ぜひ改めてお聞かせいただけると嬉しいです。本日は、長時間にわたりお話をしてくださって、ありがとうございました。

聞き役プロフィール

梅垣昌子　名古屋外国語大学　外国語学部　英米語学科　教授

専門はアメリカ文学。共著『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』（松籟社、二〇一六年）、共訳『評伝ウィリアム・フォークナー』（水声社、二〇二〇年）など。近刊『囚われて』（名古屋外国語大学出版会、二〇二一年）では、短編「ドライ・セプテンバー」の翻訳を担当。

インタビューを終えて

今回、亀山先生のご著書に関するインタビューの機会をいただき、ドストエフスキーの世界の圧倒的な「黒さ」すなわち「豊饒性」を改めて実感しました。それと同時に、書かれていることすべてを理解するには、自分の経験や時間や思考力が全然足らない、という現実にも直面したのですが、初心者にもわかりやすい言葉でご説明くださり、とても勉強になりました。休む間もなく、次のご著書の仕上げに入っていらっしゃるとのこと、さらなる豊饒な言葉に出会うのを楽しみにしています。